

vol.22
2014年
4月



江戸川区
聞き書き
研究会

聞き書き研究会とは、江戸川区で生活し、江戸川区を愛し、強く逞しく生きた女性の姿を江戸川区女性センターの区民ボランティアが「聞き手」となって編集し、文書として残すための活動です。

「区民の立場で地域と行政をつなぐ」 -わたしにできることをこれからも-

まつ かわ かおる
松川 香

1942年(昭和17年)
愛知県西尾市生まれ
鹿骨在住



■ 上京して出会った素敵な仲間たち

純粹に見合い結婚だったんです。上京し、最初に住んだのが江戸川区の松本町。そこに夫が住まいを用意してくれましたから。ほんとに右も左もわかんない、親戚も知り合いも1軒もない、ただ夫だけが頼りの生活が続いたんです。昭和42年に男の子ができて、子育てが始まると、忙しさで気が紛れましたが、2年後には次男が生まれました。

東京は生き馬の目を抜くところだと思ってましたので、何年間かは本当に寂しい日々で田舎に帰りたいなあと思いつつながら子育てしてはいたんですけど、長男が幼稚園に入って、友だちができて、それでなんかちょっと元気になって、昔の自分が出てきたかなって。小学校は幼稚園で顔見知りの大先輩がいらしたので、ちょっとほっとしながらの入学だったんです。まあ、やはり専業主婦ということで、PTA役員とかやりました。

松本町の家は古かったから、12年くらい住んだらもう傾いてきたんで、都営新宿線が近くを通るとい話を聞いて、昭和53年に今の鹿骨^{しかほね}に越したんです。越して何日も経たないうちに町会長さんの訪問がありました。松本町の役員さんから紹介されたらしくて、いきなり青少年委員というのをお願いしたいとのことでした。突然で「えっ」て感じだったんですけど、家にいましたし、早く慣れなくてはいけないという気持ちと、私はもうここに永住かなと思っていたので、子どもたちに「どーお」って聞いたら、「飯さえ作っておいてくれたらいいよ」って言われ、夫も「子どもさえ了解してくればいいじゃない」って。「じゃあ、お手伝いさせていただきます」ってということで、最初はその青少年委員でしたね。

■ 区民ガイドで24年間

青少年委員は、区民館単位の地区委員会のメンバーにもなり、自然と指導的立場に置かれちゃうんですね。青少年委員は2期4年間やらせてもらい、それから2年後かな、鹿骨事務所の係長から電話がかかってきて区民ガイドの話があったの。どんな仕事かわかりませんでしたが、説明をするからということで区役所に行きました。区内

めぐりのバスガイドで、区民に身近なママさんたちにやってもらいたいということでした。これは無理かなと思いつつ電話したら、「やってみないとわからないですよ」と言われて、結局出発したんですよ。

富士急観光のベテランガイドさんに、バスに乗車するエチケットや心構えを教わりました。ガイドの内容は全て自分で勉強しました。もちろん教科書はありましたよ、分厚いのが。40代で若かったでしょ、頭に入りましたね。江戸川区の歴史、1回読めばわかるかな、そういうような年代でした。一生懸命勉強しましたよ。まず新聞を読むようになりましたね。隅から隅まで、ニュースを。行政に関しても、浅く広くで良いけれどわかってないと質問に答えられない。意欲があったもんだから、大変とか苦労と思いませんでした。何年後かには本当に楽しい仕事になりました。

10年過ぎた頃には自分なりにいろんな話ことができました。今日はこういう団体だからこういう話を、明日はこんなことを。行く場所、時間は決められているから、話題の持っていく方ですごく盛り上がりたり、喜んだり。区内めぐりは江戸川区の施設紹介が中心ですから、コースの中にフラワーガーデンとかはぐすところを1、2ヶ所入れるんです。親水公園も世界的に注目浴びちゃったじゃない、「これが汚いどぶ川だったんですよ。蚊が発生して水がよどむ、それがこんなきれいなところになったんです」という説明をすると、みなさんがほんとにびびりして。やりがいのある仕事でしたよ。丸24年ですか、平成25年3月まででしたからね。

■ 学びあう会をめざして

生まれたのは昭和17年2月、愛知県^{はすきらよだ}幡豆郡吉良吉田(現西尾市)です。実家は町で一軒だけの小さな旅館で、祖母が明治の時代に始め、母が後を継ぎ、今は弟の嫁がやっておりますが。父は鹿兒島出身ですが大阪の海運会社に勤めていて、吉良吉田に出張で来て、長逗留したんですね。それで、娘だった母と、もう田舎に帰らないということと結婚したという話です。半農半漁の町ですから、戦争の時でも食糧難とかいう記憶はなかったですね。塩の生産がさかんで、豊かだったという印象です。

昭和23年に吉田小学校に入学。中学校は隣にある

吉田中学校で高校は県立西尾高等学校。普通科で、大学に行きかかったんですが、母と祖母に「とんでもない、女が大学なんて」と言われ、あきらめて地元銀行に就職しました。5年間勤め、上司の紹介でお見合いをし、退職しました。結婚したのは昭和41年3月でしたね。

小学校の頃は「ガキ大将」でした。女の子が男の子にいじめられると先に立って男の子に向かっていくような。小学校の同窓会に行くと、「誰かをいじめると、香が先頭立って来て、おれ、おっかなかったよ」と言われたことがあります。中学時代はソフトボール部のキャッチャーもしていました。ものすごく元気で、男の子を従えて、動いているような子だったのね。高校の時は演劇部で活動し、結構明るくにぎやかで、勉強も体育でも音楽でもなんでもできたね。その意味では、教育熱心な親ではなかったんですけど、親孝行したかなあって感じ。

この地区でのデビューは鹿骨区民館まつりででしたね。メインの司会は男性だったのを、そろそろ女性をということと、初めて司会をしたの。本当にドキドキもの。上手にできたかどうかはわかりませんが、それから何年間かやってますね。高校時代、舞台に立った経験が生かされたのかな。



◆区民ガイドとして活動中の松川さん

他の地区では「母の会」という婦人部の組織があったんですが、昭和63年に鹿骨地区でもようやく17町会で活躍している人を会員にして「はとの会」という会ができたんです。地元の奥さんとかでしたので、私なんかが入るところではないなと思いつつながら、地区委員とかやりましたので、メンバーの1人になってしまったんです。

ただ、横の繋がりが一切ないんですよ。男性の役員は交流があるのに女性はないのでおかしいなと思っていたんです。時が経ち、いよいよ私たちの代になった時、「17町会の婦人部の代表が集まって運営していく。楽しみだけでなく、ボランティア活動や自分たちの研修・研鑽も入れていきたい」と提案をしたら「それはいいことだね」と話になり、すごくうまくいったの。

会費をとらないので、5月の区民館まつりでリサイクルバザーを行い、それで運営しようということに。ですから、学習会には、お金のかからない区の職員とか、ガイドをやっていた時顔見知りになった方に講師をお願いしているの。2、3ヶ月に1度、常任幹事会を開いてるんですけど、皆さんの意見をよく聞くようにしているんですよ。世代も町会も違うので勉強になりますよね。最近ようやくひとりひとりが発言するようになって、居心地が良くなったみたい。「うちはこうなの」「いいねえ、おたく

はどうですか」「あそこの町会はこういう風にやっているとでもいいんだってよ」と言うと、それが他の町会にも反映される。そういう意味で17町会の婦人部の集まり、ちょっと目的も果たしたのかな。

大好きな江戸川と共に生きる

昭和55年の青少年委員に始まり、区民ガイド、ふれあい訪問員、保護司、行政相談委員や江戸川区廃棄物減量推進審議会委員、町会副会長、そしてはとの会会長といろんなことをやっているのと相談事ってすごくあるの。「道路に水が溢れちゃって、どうしたらいいかしら」なんて相談受けたこともあるの。ガイドやってたおかげで「あそこに電話すればいいな」ってことがすぐわかる訳。忙しい日々を送っていますが、ひとつひとつの経験が重なって、活動を支えてくれます。

ふれあい訪問活動は、ひとり暮らしやお年寄りのみの世帯を訪問して、安否を確認したり、話し相手になったりする活動なんです。その原点は結局、親にほどとてもよくしてもらった記憶があるのに、母の看病ができなかったことへの悔いがあるの。「ひと(相手)の立場に立ってものを考えなさい」との母の教えも頭をよぎりますね。

廃棄物減量推進審議会に出ていった時は、専門家たちの中で通したのは「はとの会」は主婦の団体ですから、専門的なことは言えません。主婦の意見しか言えません」ということでした。田舎にいた時はね、男の子を引き連れて歩くようなお転婆だったんですが、本当はものすごく引込み思案だなあと自分でも思いますね。はとの会を会長を受けたからしょうがないかなと思うんだけど。

田舎というのは、若い頃しかなくて、その頃はあまり興味がないの。結婚して田舎に帰るようになってから、初めて吉良上野介こうすけのすけの菩提寺へ友だちに連れて行ってもらったんですよ。江戸川区の歴史は区民ガイドになってから、自分で勉強したの、もともと歴史が好きなので。江戸川区には楽しめるところがたくさんあるわ。フラワーガーデンのバラとか、小岩には菖蒲園もあるわ。バスに乗って帰って来る時「遠くに行かなくても江戸川区で充分楽しめるね」とって皆さんおっしゃってくださいのよ。中でも私が一番気に入ったお薦めの場所は、「一之江名主屋敷」でしょうかね。趣があって江戸時代の生活が感じられるものが残っているから。

のどかな愛知の片田舎でおおらかに育った平凡な主婦が、折々に出会った方々に恵まれて、応援をいただき今の私があると思います。家族をはじめ周りの人たちにいつもいつも、感謝をしながら楽しくボランティア活動を続けています。

